

センターニュース

Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter



高等教育ジャーナル年2回発行に	3
論文指導の平均履修者数増える	4
客員助教授にバレッジ氏着任	8
国際ワークショップ続報	8
北海道大学公開講座の募集始まる	10

巻頭言

FOREWORD

研究していれば教育できるか？

教育学部教授 逸見 勝亮



◇「先生は教員免許状をもっているのか」と学生に質問され当然「ない」と答えた、という話をある大学教員の会合で聞いた。学生は、小中学校や高等学校の教員となるには資格が要るが、大学教

員となるには教育実習もない、ということに疑問をもったのである。その会合ではしばし「研究者であれば教育者である」のかどうか話題となった。

◇大学教員の大学における評価は研究者としての評価が何よりも優先する。採用・昇進人事選考に直接かかわった経験がなくとも、誰もがこの断定

を承認するだろう。昨今の点検評価・大学院重点化の動きの中で「研究業績の評価」をいやというほど味わっているのに「何を今さら」と思うかもしれない。採用・昇進の基準が研究者としての評価によっているとしても、教員は“職務”として教育活動に相当の労力を割いていることは確かである。しかし、教育担当者としての基準は、すぐれた研究者であればすぐれた教員であるという楽観主義以外にはない。しかも、「教育は重要だ」とは掛声に過ぎず、教育活動に熱心な教員はときに揶揄・軽侮の対象でさえあり、自ら教育活動に研究と同等の価値を見出すひとは稀である。大学教員は研究に専念したいのである。任期制導入で研究業績が問題となると考えているひとは、『大学教員の任期制について』（大学審議会）が冒頭で「学生の知的好奇心を触発・持

続させ得る充実した内容の授業科目やこれを担当する魅力ある教員が少ない」と述べていることを知るべきである。

◇大学院の主要な責務が研究者養成であり、その研究者の少なからぬ部分が大学教員である。その意味では大学院は大学教員養成機関でもあるが、当事者たちがそう意識しているとは考えにくい。大学教員は、演習・調査・実験・論文執筆・学会報告・日常的討論などさまざまな形態で院生を指導している。その際に、彼等が研究者・高度な専門家として自立することを念頭におく。われわれは大学教員の養成を考えながら院生の研究指導はしていない。TA（ティーチング・アシスタント）制度もあるがむろん補助者に過ぎない。高校教員免許に必要な2週間の教育実習では数回から10数回の授業を行い、最終段階で多くの教員や実習生が参観する研究授業を課するのが通例である。小中学校教員資格取得の場合にはこれに数倍する実習期間と授業数を課す。ところが、院生はわれわれがそうであったように、研究以外の特別な訓練を経ることなく大学教員に就いてしまう。要するに大学教員は、勤めるまで教員としての訓練を受けたことは一切なく、勤めてからはもっぱら研究者としてのみ評価を受けるのである。

◇とはいえ、大学教員は大学に勤める限り教員たらざるをえない。それは、大学から学生を除けば大学ではなくなるという極めて単純な事実によって動かしがたい。のみならず、研究者たらんとすれば教員たらざるをえない。それは、研究活動は本来その内部に研究成果の普及・後継者の養成を含んでいるというこれも単純な事実によっている。さらに敷衍すれば「研究者は非専門家である外部世界に対して……倫理的義務として、自分たちのやっている研究の内容を説明し、納得して貰う義務があり責任がある」（村上陽一郎）ということになる。大学教員が倫理的義務と責任を負うべき「外部世界」はまずもって学生であるから、「義務と責任」を教育と読み替えてもよい。内部に研究成果の普及・後継者の養成を含んでい

るとしても、研究活動のみで「義務と責任」は果たせないことは明瞭である。そもそも、およそ職業とよべるほどの活動はその内部に後継者養成・確保＝教育という機能を持続できなければ持続しない。講座に数年にわたって院生・学生がいない状態は想像するだに恐怖である。

◇大学における教育の根幹は、知識の体系を創造に転化させることである。しかし、たちどころに受験勉強で培った断片的な知識の集積を身にまとった学生（しばしば院生も）に「自ら学ぶ」ことを「外から教える」という大きな隘路にぶつかると。これを打開するには、学生の状態を嘆くのではなく、細分化している科学の成果の体系化・統合を常に示すとともに、研究の手続きや方法を伝える以外にはない。まして断片的な知識の集積を笑ってはならない。このような教育が説得的である保証は、唯一教員が現在進行形のオリジナルな研究に従事していることである。大学教員は職にあるだけで誰もが教員となれるわけではない。

◇講義内容は、当該領域の教育の必要性によって定まるが、担当者が承知している研究成果のみで内容を構成できないとき、それらは重要な研究課題たりうる。自分の問題関心にも染まぬそのような課題設定では、学界では勝負にならないという反論を予想するのは容易である。しかし、大学で学生に講義できないような課題で研究しても仕方がない。

「講義で自分のテーマを話せないのは研究水準が低いからだ」と述べて友人を失ったこともあるが、僕は講義や討論の最中に着想が浮かんだとき少し元気になる。研究は教育の場でこそ発展するともいえるのである。そして、僕は学会報告より講義の方が緊張する。いまだに講義の前日には熟睡できず、終われば気が滅入る。

センター CENTER

「高等教育ジャーナル」年2回発行に

高等教育ジャーナルへの論文の投稿が多くなってきました。この状況を緩和するためにジャーナルの発行を年間2回に増やすことにしました。発行および原稿の締切は以下のようになります。

9月発行 原稿 7月末締め切り

3月発行 原稿12月末締め切り

また、センター専任教官の他に以下の方々にも査読を依頼し、より公正で質の高いジャーナルになるべく企画しております。

文学部 坂井昭宏 教授 (西洋哲学)

教育学部 竹田正直 教授 (教育史)

経済学部 吉野悦雄 教授 (比較経済)

農学部 三上哲夫 教授 (植物遺伝)

言語文化部 筑和正格 教授 (ドイツ語)

具体的教育に関わる一般性のある内容の投稿をお待ちしております。投稿資格は特に問いませんので、様々な分野の先生方からの投稿を期待しています。投稿規定は高等教育ジャーナル第2号の巻末を参照して下さい。

全学教育

全学教育委員会開催される

4月22日に第13回(平成9年度第1回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

議題1. 全学教育委員会規程の一部を改正する
規程(案)について

議題2. 全学教育委員会副委員長の選出について

議題3. 全学教育委員会小委員会等の構成について

議題4. その他: 委員会の今後のスケジュールについて

今回は、平成9年度第1回の委員会であり、大半の委員の任期交代がありましたので、各種委員会および委員の構成が主要議題となりました。

議題1について委員長から、今後、全学教育を実施していくに際し、センターの高等教育開発研究部および生涯学習計画研究部の両研究部と連携を

図りながら進めていきたいと考えており、両研究部の部長を全学教育委員会の構成員に加えるよう規程を改正したい旨諮られ、審議の結果、了承されました。

議題2については委員長から、副委員長として、前副委員長の医学部阿部和厚教授に引き続いてお願いしたい旨諮られ、了承されました。

議題3では、委員長から、

(1) 小委員会の構成について

(2) 科目別専門委員会の構成について

(3) 学生問題担当委員の選出について

(4) 各種委員会委員の選出について

それぞれ諮られ、審議の結果、原案の通り承認されました。この結果、小委員会委員長には、理学研究科山口佳三教授が引き続いて選出されました。また、この中で、委員長より本年度の小委員会では、従来からの検討課題に加えて、特にレ

ビュー関係を中心に各専門委員会と連携を図りながら検討を進める体制としたいとの考えが示され、科目別専門委員会の委員長には小委員会のメンバーを充てる構成となりました。

議題4について、委員長から、本年度は従来からの任務に加えて、特にレビューの事項を中心に検討したいこと、基本的には、10年度から改善すべき事項が実施できるようなスケジュールで進みたい。全学教育の検討は、本委員会やセンター内の組織だけではなく、各学部内での検討や、事柄によっては、教務委員会等の他の委員会に検討をお

願いしなければならないことが出てくると考えられ、具体的施策として規程の制定・改正等へつなげていくためには、かなりの期間を要するものと思われる。そのため、5月19日までに、各部局において全学教育について平成10年度から実施したい事項および改善を希望する事項を提出していただき、それを踏まえて、昨年度からの継続課題とともに小委員会、専門委員会で具体の検討を進め、小委員会で、ある程度の取りまとめを行ったうえ、学部への照会等の作業に入る手順としたいことが述べられ、これが了承されました。

論文指導の平均履修者数増える

平成9年度第1学期の履修状況は表1のようになりました。一般教育演習の平均履修者数は34.7名で昨年と同様ですが、総合講義（163.9名）論文指導（47.4名）は大きく増加しています。15人程度の少人数教育を目指した一般教育演習（34.7名）も、論文記述のきめ細かな指導を目指した論文指

導も、当初の予定を大きくうわまわる人数となっています。各学部の努力により講義数は漸増していますが、受講者数がそれを越えているのが現状です。このままでは担当教官への負担増や教育の質の低下が危惧されますので、さらなる開講が期待されます。

表1. 総合講義などの開講数

	7年度第1学期	第2学期	8年度第1学期	第2学期	9年度第1学期	第2学期
総合講義	18 (88.4)	14 (80.8)	19 (96.6)	12 (144.6)	24 (163.9)	13
一般教育演習	46 (31.3)	25 (31.4)	46 (36.4)	34 (33.2)	51 (34.7)	30
論文指導	30 (33.2)	31 (24.4)	24 (42.4)	37 (37.0)	33 (47.4)	31
（内訳）思想と心理	4 (45.0)	5 (22.2)	2 (25.5)	7 (20.9)	3 (22.3)	5
歴史と文化	6 (33.8)	5 (23.8)	4 (32.3)	6 (18.3)	6 (20.7)	6
言語と文学	9 (33.8)	9 (25.4)	7 (66.9)	8 (71.0)	10 (64.0)	8
社会基礎構造	2 (48.5)	7 (26.4)	4 (28.3)	6 (15.8)	3 (106.0)	4
社会関係と社会行動	7 (23.3)	4 (22.8)	4 (37.5)	7 (58.6)	8 (42.8)	5
法と制度	2 (25.0)	1 (22.0)	3 (35.3)	3 (13.7)	3 (24.3)	3

* かつこ内は平均受講者数

高等教育 HIGHER EDUCATION

新任教官歓迎説明会開催される

去る6月5日の開学記念日に、新任教官歓迎説明会が医学部臨床大講堂で行われました。この会は、新任教官を主対象とし一般教官もまじえて、大学教育について考え、討論する集まりです。今回の参加者は（一般教官24名も含めて）73名と着実に増加し、3回目となったこの会の意義が北大内で認知されつつあることが窺えました。

今年は「学生参加型の授業」というテーマがとりあげられ、講師たちによる情熱あふれる講演と、そ

のあとの活発な質疑応答で盛り上がりました。最後のセッションでは、18名の教官が“学生”としてフロアに用意された“教室”で参加型の授業を体験しました。この“学生”たちは実に優秀で、与えられた課題に熱心にとりくみ、見事に役割を演じたことが印象的でした。

以下に、各講演者による講演要旨を掲載します。

アブストラクト

学生参加型授業の生産性

高等教育開発研究部部長・医学部教授
阿部 和厚

今日の学生は、しばしば、授業で学習意欲をみせないと云われます。これまでの伝統的な大学の授業は、専門教育での実習、演習などを別にすると、教師から学生への一方的知識伝授中心の講義となり、授業の成果は、主に記憶しているかどうかのみで測られていました。ここでは知識の記憶が教育のプロダクトとなります。

一方、学生参加型授業は、学生の討論や行動を中心に展開するものです。小グループ化、学生同志の討論、役割分担、共同作業などで、学生の全員が参加するようなデザインにします。教師は、ここでは丁度、高校野球のコーチのような役を演じます。学生を教室のみでなく、研究室や社会の現場に出ている状況設定もします。このような授業では、学生と学生、学生と教師とが互いに影響し合い、大いなる教育効果をあげ、討論能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性、共同作業能力、責任感、洞察力、相互反応性、能動的行動力、社会

性、自己認識、自己開発、そして知識発見、知識定着、知識発展能力などが身につくこととなります。このような授業は、これまでの一方的識伝授型授業にくらべて、きわめて多くのプロダクトを示します。生産性の高い教育となります。

最近の大学改革は、社会的責任のうえで生産性の高い教育、研究を求めているのです。

新任教官による学生参加型授業の実践

言語文化部助教授 大崎 雄二

ほとんど聞き取れないような小さな声で「ボソボソボソ……」, 「エッ、なに?」と聞き返そうものなら「ボソボソボソボソ……」と音声フェードアウト, 「もう一度」と促すと「……(沈黙)」, 「敵」は教科書やノートを見返す努力も何もしないでボーっとしたまま。しまいにはこちらがしびれをきらすのを待ったあげくに「わかりません」とポツリと言。

1995年10月, 全学教育科目・中国語担当教官として採用された新任教員の私にとってはきわめて

衝撃的な「腐乱死体」＝北大生たちとの出会いでした。それから数カ月、思い悩み、恩師に相談し、胃痛を起こし、ときには捨て鉢にもなりながら教室を活性化しようと重ねた試行錯誤の数々。「ちょっと先輩」から「傾向と対策（実践編）」をお届けします。

討論を中心とする授業の展開

— その方法と実際 —

高等教育開発研究部教授 小笠原 正明
同 助教授 細川 敏幸

現代の学生は自分の意見を持たず、ものごとを深く考えないと言われているが、その多くは誤解によるものである。時間をかけてつきあうと、学生たちは（当然にも）それぞれ個性的で、良く考え、人々の役にたちたいと考えている。一見そのように見えないのは、自分の考えを率直に述べ、相手の意見を理解しそれに賛成あるいは反対するために必要な基本的なコミュニケーションの習慣ができていないからである。従来の一方向的な知識伝授型あるいは命令遂行型の教育は、このような学生の現状に対して無力であるばかりでなく、それを悪化させるという意味で、場合によっては有害でさえある。学生にコミュニケーションのスキルを獲得させるためには、ある筋道立った教程が必要である。その1つとして、討論を中心とした授業の方法とその実際について解説する。

質問書方式による講義

— 会話型多人数講義 —

社会情報学会会長・北大名誉教授
田中 一

講義の最初に聴講学生に B5 版の質問書を配布する。学生は講義の内容に関する質問とその質問の背景を記して、講義の終了時に提出する。質問書から 50 程度の質問を選び、A4 版 4 枚の 8,000 字程度の回答書を毎回次の講義時に配る。質問書に対し 0, 0.5, 1 の評価をし、試験は行わず、質問書

の評価のみで、成績評価と単位取得を決める。すなわち学生を質問で評価する。質問の回答に質問することで、講義者と学生との間に、質疑のラリーが続く。また、他の学生の質問を見て、多面的な見方を学ぶ。以上の 2 点は質問書と回答書を媒介とする会話が成り立つことを意味する。無記名アンケートは、250 名の履修学生中 8 割が「考える習慣が付いた」、「考える力が付いた」と答えている。大衆化された大学の講義形式に、学生の能動性を形成するという新しい局面を開いたといえよう。私語はほぼ皆無である。過去 9 年間の質問書の総枚数は 82,492 枚にのぼる。

学生に恥ずかしがらずに話させる方法

獣医学研究科教授 藤田 正一

私は教えるのが苦手である。特に教科書に書いてあることを（読めば分かるのに）説明しなくてはならないのはとても苦痛だ。ある年は教科書無しで講義した。学生はついて行くのが大変だと言った。翌年は苦痛に耐えつつ教科書にそって講義した。聞く方も話す方も面白くない（であろう）講義であった。そのころ、学生が「何処まで覚えれば良いのですか」という質問をした。大学 3 年生からこの様な質問が飛び出したことにいささか驚いた。覚えるのではなくて考え方を培ってくれ。それからは教科書に対応するトピックスを選んで、学生の考えを聞きながら講義を進めるようにした。知識を問われると学生はたじたじとなって緊張する。しかし考えを聞くとよく話す。手をあげて発言する学生も現れた。知識がないことを大きな恥と思っているようだが、考えつかないのは恥では無いらしい。何人かに意見を聞いて、答えられなかった学生にも再び質問する。変わった考えや素晴らしい考えを言った学生はおおいに誉める。こちらの感動や驚きを態度で表現する。そのようなやり取りが学生に話しやすい雰囲気を作るようだ。

授業における 学生とのコミュニケーション

— 参加型授業の体験 —

学生参加型授業にはいろいろな形式があります。ここでは、作業を通じて学生同志が影響し合うこと（group dynamics, interaction）で、学習効果をあげる小グループ学習を取りあげます。これは、教師が中心となって小人数の学生を対象にしているものとやや異なり、学生を主役にし教師は学生の背後にあってタスクフォースを演じ学習を支援する形式です。

小グループ学習を、参加者は学生の役となっ

て、表 2 のような手順で体験研修をします。役割分担の原則、発表、討論、小グループ学習などを体験的に知るのがねらいです。

当日は、出席者 6 人を 1 グループとして、3 グループをつくり、各グループ員をリーダー、記録係、発表資料（OHP）作成係、発表係などの役割分担に分け、2 回のグループ作業をしました。1 回目が「講義で出席状況を成績に加味すべきか」A. すべき、B. すべきでない、C. 出席させる方略、について、2 回目は「同名科目で複数教官担当の異なる」A. なぜか、B. どうしたらよいか、C. 英語の場合どんな基準がよいか、について、グループでまとめ発表し、全体で討論しました。タスクホースは高等教育開発研究部の阿部和厚教授でした。

表 2. 体験の手順

(1) 参加者のグループ分け（1 グループ 6 ～ 7 人程度）	5 分	(Step 3) 発表と討論	
(2) ミニレクチャー：グループ学習についての説明（方略、グループ員の役割など）	5 分	各グループの発表（3 分ずつ）	
(3) グループ作業 I（テーマ I）		それについての全体討論（3 分ずつ）	(3 グループとして) 18 分
(Step 1) グループ内での役割の分担	2 分	(4) グループ作業 II（テーマ II）	18 分
(Step 2) グループ内での作業	15 分	(5) まとめ	5 分
		全体討論	5 分
			(計 90 分)

学内研究員追加

新研究プロジェクト「コア・カリキュラム研究会」，「学生を中心とした授業開発研究会」発足にあわせて、学内研究員が追加されました。前者の研究会では、各学部学科の専門性に必須の一般教養科目とは何かを明確にし、教養教育の在り方を検討します。

氏 名	所 属	専門分野	研究テーマ
坂井 昭宏	文学部教授	倫理学	コア・カリキュラムに関する研究
新田 孝彦	文学部教授	倫理学	コア・カリキュラムに関する研究
白取 祐司	法学部教授	刑事法	コア・カリキュラムに関する研究
吉野 悦雄	経済学部教授	国際・比較経済論	コア・カリキュラムに関する研究
山口 佳三	理学研究科教授	数学	コア・カリキュラムに関する研究
石垣 壽郎	理学研究科教授	科学基礎論	コア・カリキュラムに関する研究
小泉 格	理学研究科教授	地球惑星進化科学	コア・カリキュラムに関する研究
長谷川 淳	工学研究科	電磁エネルギーシステム工学	コア・カリキュラムに関する研究
波多野隆介	農学部教授	土壌学	コア・カリキュラムに関する研究
高杉 光雄	地球環境科学研究科	生体機能化学	コア・カリキュラムに関する研究
佐藤 公治	教育学部助教授	教育心理学	大学における学生を中心とした授業の開発
大崎 雄二	言語文化部助教授	中国語	大学における学生を中心とした授業の開発

客員助教授にバレッジ氏着任

9月末日までの予定で、ロンドン大学経済政治学部講師バレッジ氏が客員助教授として活動を開始しました（詳細は次の記事参照）。滞在中にいくつかの講演会を予定しております。また、9月に開催する国際ワークショップの講演者および実行委員の任にも着きます。「先進諸国の間で、大学と実際の専門家の世界との関係がなぜ大きく異なるのか？」が、研究テーマです。バレッジ氏は米国、ロシア、フランス、英国の大学と専門職（医師、弁護士等）の関係についての多くの著書があります。これらの研究テーマについて興味がありましたら、ご連絡下さい。電子メールのアドレスは guest1@kyoyo.high.hokudai.ac.jp、内線は2195です。

国際ワークショップ続報

9月25日～27日に北大で開催される国際ワークショップ「これからの大学教育と教育評価」の講演者を紹介いたします。このワークショップでは、高等教育改革先進国でリーダー役を務められた方々を中心に、日本の大学の将来を考えるための参考となる講演が多数用意されています。このような国際ワークショップが大学で企画実施されるのは、我が国では初めてのことです。なお、同時通訳によって言葉の壁を取り払う予定です。ふるってご参加下さい。



ロソフスキー教授：ハーバード大学で長く学長を務められた米国の高等教育の指導者の一人です。高等教育に関し賞を受賞されました。わが国からも勲2等瑞宝賞を授与されています。経済学が専門ですが、一般向けの著書では *The University-An Owner's Manual*：訳本「大学の未来へ」（TBSブリタニカ）が有名です。



リアドン教授：米国ポートランド州立大学の教育担当副学長を長い間務めています。ポートランド州立大学は、最近、公立大学の在り方、大学の社会的役割を踏まえた大学改革を行なって、米国の公立大学改革のリーダー大学となっています。歴史学が専門です。



バレッジ氏：英国ロンドン大学のレクチャラーで、経済学が専門です。職業教育の面で国際的第一人者です。英国のサッチャー政権による教育改革を研究しています。本年度の当センターの客員助教授として来ました。



テナント教授：オーストラリアのシドニー工科大学の教育学部長を務めました。大学教育における教授法の開発、教育の評価に取り組み、オーストラリア政府から高い評価をえています。1995年度に当センターの客員教授として来日しました。教育学が専門です。

ウィリアム教授：米国マサチューセッツ大学の副総長です。マサチューセッツ大学は北海道大学と姉妹校であり、教養教育の模範を示しています。ここでも、大学改革を積極的に進めています。

ウエッツエル教授：米国ポートランド州立大学の外国語教育担当教授です。日本語も堪能で、日本の若者の手紙における、愛ということばをめぐる研究、ことばを通じての文化比較研究、留学生教材開発の研究等を行っています。

カリキュラム設計シリーズ4 成績評価

高等教育開発研究部 阿部 和厚

平成 8 年度の全学教育のレビューで、最もめだった学生の意見は、授業法に関する不満と成績評価に対する不満でした。今回は、成績評価についてとりあげます。これにより、カリキュラムの 3 要素、「目標」「方略」「評価」が完結します。

成績評価に関して学生の不満は、評価の正当性にあるようです。とくに、同じ科目を数人の教官で開講するとき、教官によって成績評価基準があまりにも違いすぎると訴えています。これらの問題は、教官が成績評価の原則を理解していないこと、学生が成績評価の原則を理解していないこと、成績評価はその科目を学ぶ目標の達成度で計測されることを知らないこと等によります。

評価は達成度の計測：成績評価は、その科目の学習目標の達成度を計測し、その価値判断をし、意志決定をする一連の作業です。ここではまず、すでに述べた学習の目標をどこにおくかが問題となります。すなわち、成績評価は教育の原則、カリキュラム全体と関連します。

何を計測するか：到達すべき目標は、分類すると、知識、態度・習慣、技術がありました。知識でいうと教えたものを記憶しているかどうかというレベル、これを使って解釈できるレベル、未知の問題を解決できるというレベルまで様々です。評価で何を測るかで、問題のだし方が異なってきます。

評価の妥当性と客観性：評価、すなわち計測には、誰が測っても同じになる妥当性が必要です。計測の物差し、すなわち観察可能な目標（目標の記事を参照）の設定が問題になります。また、これには客観性も求められます。同じ科目であれば、先生によって評価が辛い甘いはちがわなことが求められます。

成績評価の種類：評価には、時期と関連して学習前のプレテスト、学習中の中間テスト、学習後のポストテストがあります。また、科目の終了後

に、どれだけ目標達成できたかをポストテストで計測し、進級判定、卒業判定に用いていくもの等は、「総括的評価」と呼ばれます。一方、中間テストなどは、学生および教官へのフィードバックを目的とし、これにより学生は学習法を、教師は教授法を矯正していくもので、「形成的評価」と呼ばれます。学習の形成過程を改善していくものとして、重視されます。

試験には、計測する教育目標に適した様々な方法、論述試験、口頭試験、客観試験（マルチプルチョイスなど）、観察試験（尺度評価をするなど）、実地試験、レポート、論文などがあり、これらを組み合わせるのが総合的評価に結びつきます。観察による尺度評価は、態度・習慣の評価に適しています。たとえば、「よく質問する。54321」と、評価項目を作ります。

学部の目標：学生は、ある学習目標を達成するために入学し、これを達成して卒業します。この目標は、学部等で明確であるはずですが、そして、種々の科目を履修することは、卒業までの目標達成手段（方略）となります。

合否の判定基準：合否の判定には、絶対評価の基準が必要です。これを理屈で説明するのは、このスペースではむずかしい。教官のひとり、ひとりにつぎの質問をして終わります。

あなたの科目は、その学部の教育目標（学生の学習目標）と関連して、どんな役割をもつのですか？ これをあなたの科目の学習目標として表現できますか？ これが表現できなければ、その科目はその学部にとって必要ないことになります。また、同名科目を担当している教官によって評価の基準が異なるのは、大学教育、学部教育の無視とも言えます。学部一貫教育とは何ですか？

今大学の教官は、大学教育の在り方に自分を合わせる姿勢が問われています。

北海道大学公開講座の募集始まる

平成9年度の北海道大学公開講座は、「21世紀への宿題—この豊かさ？どう引き継ぐか—」をテーマに下記の日程で行われます。20世紀は豊かな時代と言われていますが、一方で情報の氾濫やエネルギー問題、食糧問題、ごみ問題、いじめ、新型伝染病、政治・経済問題等あらゆる分野で多くの問題を抱えています。この講座では、多面的視野から、21世紀に向けて、これまでに築いた資

産をいかに維持し、また問題を解決し、対処していくべきかについて考えます。

講座の申し込みが6月11日（水）から始まっています。申込先は、高等教育機能開発総合センター内の学務部教務課生涯学習掛（電話706-5252・5253）で、6月27日（金）まで受け付けております。

日程	講義題目	講師
1) 7/ 3（木）	新型伝染病の発生要因と予防	高島郁夫 獣医学研究科教授
2) 7/ 7（月）	マルチメディアは未来社会に何をもたらすのか—Being Digital 社会の未来は—	青木由直 工学研究科教授
3) 7/10（木）	エネルギー・環境と化学	魚崎浩平 理学研究科教授
4) 7/14（月）	いじめの深層、心の傷の回復	横湯園子 教育学部教授
5) 7/17（木）	ごみゼロ社会をめざして	田中信壽 工学研究科教授
6) 7/24（木）	21世紀の食糧問題と日本	三島徳三 農学部教授
7) 7/28（月）	市民活動が豊かな社会を作る	田口 晃 法学部教授
8) 7/31（木）	個人資産1,200兆円はどこへ行く	菊池誠一 経済学部客員教授

大学放送講座の準備進む

今年度の北海道・大学放送講座の準備が進んでいます。北海道大学が担当するテレビ講座は「極地の科学」をテーマに表3のような日程と内容で実施されることが予定されています。また北海道教育大学が担当するラジオ講座は「女と男—ジェンダーで解きあかす現代社会—」で10月12日～1月4日の午後10時～10時30分（HBC）、全13回

にわたって実施されます。テレビ講座は、高校生の理科離れにも対応しうる内容なので、高校生向けのポスター等を作成し、独自の案内も行っています。受講の申込みは、8月18日（月）～9月12日（金）に、教務課生涯学習掛（電話706-5252・5253）が受け付けます。

表3. テレビ講座の日程と講師

放送回数・月日	中心テーマ	講師
第1回 10/5	極地と人間ー極地に挑んだ人々ー	太田昌秀 ノルウェー極地研究所研究員
第2回 10/12	凍る海ー世界気候に果たす海水の役割ー	若土正暁 低温科学研究所教授
第3回 10/19	南極1ー白い大陸ー	成瀬廉二 低温科学研究所助教授 西尾文彦 北海道教育大学釧路校教授
第4回 10/26	南極2ー氷が語る地球環境変動ー	本堂武夫 低温科学研究所教授 高橋修平 北見工業大学教授
第5回 11/2	永久凍土ー凍てついた大地ー	福田正己 低温科学研究所教授
第6回 11/9	極地の旅人ー先史モンゴロイドの移住・拡散ー	木村英明 札幌大学教授
第7回 11/16	オーロラー極地の夜を彩るー	福西 浩 東北大学教授
第8回 11/23	オゾンホールー人類起源の地球規模大気汚染ー	岩坂泰信 名古屋大学教授
第9回 11/30	極北のスモグーだれが北極の空を汚したかー	太田幸雄 工学研究科教授
第10回 12/7	シベリアタイガーー亜極地の針葉樹林帯ー	高橋邦秀 農学部教授
第11回 12/14	第三の極地ーヒマラヤー	在田一則 理学研究科助教授
第12回 12/21	氷天体ー太陽系のロゼッタストーンー	香内 晃 低温科学研究所教授
第13回 12/28	極地のゆくえー現在から未来へー	福田正己・香内 晃・高橋修平

放送曜日・時間：日曜日 午前6:00～6:30 (HBCテレビ)

センター日誌

CENTER EVENTS, *Apr. - May.*

4月

1日	・(就任) 中村睦男法学部教授が本学副学長(高等教育機能開発総合センター長、全学教育部長を兼務)に就任	22日	・(会議) 第7回予算施設委員会 ・(会議) 第20回センター連絡会議 ・(会議) 第13回全学教育委員会
7日	・新入生オリエンテーション ・生涯学習フォーラム「大学の質とは何かー教育研究社会参画についてー」	24日	・(会議) 第9回放送教育専門委員会 ・(会議) 第11回全学教育委員会小委員会 ・教務情報システム視察(東京大学教養学部3名)
8日	・入学式	24～25日	・(会議) 国立七大学共通教育主幹部局長会議及び事務協議会(東大)
9日	・学部ガイダンス		
10日	・第一学期授業開始 ・(会議) センター長・部長会議	25日	・「センターニュース」第11号発行

5月

1日	・(会議)第2回外国語・日本語科目専門委員会	15日	・(会議)第2回基礎科目専門委員会
6日	・(会議)センター長・部長会議	15～16日	・(会議)全国国立大学教養教育実施組織代表者会議 及び事務協議会(東北大)
7日	・(会議)第3回センター点検評価委員会 ・(会議)第1回庁舎整備計画推進ワーキング	21日	・(会議)第12回全学教育委員会小委員会
8日	・(会議)第9回高等教育開発研究委員会 ・(会議)第2回総合講義・一般教育演習専門委員会	22日	・(会議)第4回SCS事業委員会 ・SCS設備視察(埼玉大学1名)
12日	・(会議)第3回教養科目専門委員会	26日	・(会議)第13回全学教育委員会小委員会
13日	・(会議)第2回健康体育科目専門委員会 ・(会議)第7回生涯学習計画研究委員会	28日	・(会議)第21回センター連絡会議
14日	・(会議)第14回センター運営委員会	29日	・(会議)第5回教務委員会 ・(会議)第10回放送教育専門委員会

行事予定 SCHEDULE, June. - Oct.

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
6月	5(木) 5(木) 5(木)～8(日)	開学記念行事日 新任教官歓迎説明会 大学祭	本誌3ページ
7月	18(金) 3(木)～31(木) 22(火)～8月19(火)	第1学期授業終了 北海道大学公開講座 夏期休業日	本誌8ページ
8月	20(水)～22(金) 25(月)～9月5(金)	補講日 定期試験	
9月	9(火)正午 9(火)～12(金) 12(金)正午 中旬～下旬 25(木)～27(土)	定期試験成績提出締め切り 追試験 追試験成績提出締め切り 学科等分属手続き 国際ワークショップ	当該学部 本誌4ページ
10月	1(水) 15(水)～16(木) 15(水)～16(木)	2・3年次履修届受付 1年次履修届受付	第2学期授業開始 当該学部

編集後記

「教育は重要だ」と掛声をかけて、教育に明け、教育に暮れるわたしたちにとって、今回の巻頭言は久しい快々 ●学生参加型授業と題する新任教官歓迎説明会には、新任だけでなくベテラン教官も参加して、小グループ学習。よくできる学生たちでした。快々。こんどは学内の委員会もこれ式でやろうか ●やれ、センターニュース、国際ワークショップと言っているところへ、ロンドンからの客員教官マイケル・バレッジ先生、本日、到着。頼りにしています。熱烈歓迎。(和)

センターニュース 第12号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日: 1997年6月25日

発行元: 北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒060 札幌市北区北17条西8丁目
電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854編集委員: 小笠原正明・西森敏之・◎細川敏幸・
町井輝久・山口佳三ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話: (011)706-2194; FAX (011)706-4922インターネット ホームページ: <http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center>